

## 応永の外寇と少弐氏

応永の外寇は、応永26（1419）年6月20日～7月3日、朝鮮の兵船が対馬に来襲した事件です。前代の高麗時代より、沿岸部への倭寇（朝鮮半島と中国大陸の沿岸を襲撃する海賊行為を行った集団）の襲撃に苦しみ、たびたび日本側へその禁圧を要請してきましたが、この時はついに倭寇の本拠地对馬を直接攻撃したのでした。

少弐満貞は、朝鮮からの船500余艘が対馬津に押し寄せ、自身の代官宗右衛門以下700余騎が応戦、これにより敵軍の大半は討死あるいは捕らえられたこと、中国船2万艘が来襲するはずだったのに、大風によって大半は海に沈み、ことごとく国に帰ったこと、安楽寺（太宰府天満宮）などで種々の奇瑞（めでたいことの前兆として起こる不思議な現象）が起こったことなどを、室町幕府將軍足利義持のもとに使者を送って報告しています。実際に到来した朝鮮船は227艘でしたし、大半が討死したという事実もなく、中国船来襲の件にしても荒唐無稽な話で、いずれも満貞の誇張と考えられますが、幕府と明との関係が悪化していた時期でもあり、そのまま信じられてしまいました。蒙古襲来の時のよ



うに、大風によって敵船が沈没した、奇瑞が起こったとするのは、神国思想の高揚が窺え、興味深いです。

翌年8月、朝鮮の使者宋希璟が来日します。將軍義持のもとを訪れたところ、食事も出ないほどの冷遇を受け、不審に思った宋希璟はその原因が応永の外寇にあることを知ります。そこで、外寇の原因があくまで倭寇にあること、朝鮮側には日本攻撃の意志がないことなどを義持に釈明しなければなりませんでした。

少弐氏は、鎌倉時代には三前二島（筑前・豊前・肥前・対馬・吉岐）の守護を勤め、大友氏とともに九州御家人のトップの位置にいましたが、南北朝の内乱期を通じて次第に勢力を減退させており、このころは筑前1国の守護で、そもそも対馬守護でもありませんでした。また、博多を拠点とする九州探題渋川満頼とは、同じ筑前を基盤とすることから、内在的な競合関係にありました。こうした少弐氏をとりまく状況が、応永の外寇における少弐氏の報告の誇張につながったのかもしれない。